

亡き数に身も背く世の言の葉に残る浮き名のまたや止まらん

俊成卿女

『続後撰和歌集』卷十七「雑」の一首。

俊成卿女は一般に俊成女と呼ばれるけれど、じつさいは孫。七歳のころに父・藤原盛頼の失脚により祖父・俊成の養女となったのである。

宮内卿とともに、後鳥羽院に歌の才能を高く評価された、新古今時代を代表する女性歌人。清新で鮮やかな詠風の宮内卿に対して、俊成卿女はいくらか複雑で優艶、叔父である定家の影響が濃く感じられる詠風と言えようか。そしてまた、二十歳余りで夭逝した宮内卿に対し、俊成卿女は結婚し子を儲け、四十三歳ごろに出家、のち四十年ほどを生きて八十三、四歳で逝去したと思われる。

この歌は、その晩年の一首である。

「亡き人の数はかりが増えてゆきます。そのなかに入りたくても身体が許さずに生き永らえているわたしが歌の言葉

を残したなら、まだ生きているのかと浮き名をとどめてしまうでしょう」。

上句は高齢社会の現代にも通う内容ながら、下句に驚く「浮き名」は必ずしも恋にまつわる噂ばかりではないにしても、まさか長生きして歌を詠むことで「浮き名」が立つとは……。 (今なら浮き名だらけではないか)。

ここにはたぶん、すでに四十代で出家した俊成卿女の慎みと羞恥心が、さらに言えば自分だけが死に遅れてしまったという深い孤独感が潜んでいるのではないだろうか。

同じく『続後撰集』に、「眺むればわが身一つのあらぬ世に昔に似たる春の夜の月」(空を眺めると春の夜の月がかかっています。わたし一人が生き残ってなつかしい人たちは別の世界に生きているのに、月だけは昔のままに輝いています)の歌も見られる。これらの歌が作られた七十年代後半、俊成卿女は養父・俊成、叔父・定家、父母、前夫、息子、娘のすべてに先立たれている。

宮内卿の早世の悲哀と、俊成卿女の長寿の孤独。どこまでも対照的な二人であった。

(小島ゆかり)

